

『東方』二九九号より

台湾研究への熱いまなざし

圖左 篤樹(関西大学大学院)

私が石田浩氏に指導を仰ぐようになって、すでに十数年が経過した。氏との出会いはゼミの説明会であった。説明会の壇上で地域研究を行う者の心得として、アジア経済研究所所長の東畑精一氏の「現地主義」の実践や毛沢東の「調査なくして発言権なし」という格言を引き合いに出し、熱心に説明されていた姿は昨日のことのように思い出される。石田ゼミへ入ってから、何度となく語学習得の重要性、現地の人々との交流、調査研究の重要性について説いてこられたように思う。

少々前置きが長くなったが、本書は、「現地主義」の実践者でもある氏の渾身の書であるといえよう。一九七〇年代半ばより足繁く台湾を訪問し、一九八〇年代後半以降の民主化の進展を感じ取ってきた著者独自の台湾感覚のようなものが本書からひしひしと伝わってくる。また、「一九八七年の戒厳令解除後の台湾政治がどのような筋道を辿って民主化に至ったのか、その苦難の歴史を多くの読者に知ってもらいたく」とあとがきにある通り、本書は氏の熱いメッセージが込められており、台湾研究に関心を持つ若手研究者や学生、一般の人々にとってたいへん刺激的で興味深い内容となっている。

序章 研究課題と問題意識——独裁政権と台湾経済

第一章 戦後台湾の政治と経済——民主化と経済発展

第二章 民主化への確かな足取り(Ⅰ) 一九八九年〜一

トップページにもどる

石田浩著

『台湾民主化と中台経済関係』

——政治の内向化と経済の外向化——

A5判・三〇四頁・関西大学出版部・三、七八〇円



一九九一年

第三章) 民主化への確かな足取り(Ⅱ) 一九九二年〜一九九四年

第四章 複雑な社会構造を反映した三党体制の確立——総統選挙を睨んだ一九九五年第三期立法委員選挙

第五章 一九九六年総統選挙と中台経済——中台経済から見た台湾の将来展望

第六章 李登輝再選後の一年を検証する——総統選挙後の中台経済関係

第七章 中央を包囲する台湾の地方選挙——一九九七年第一三期県市長選挙

第八章 二〇〇〇年まで持ち越された対中政策——一九九八年立法委員と台北・高雄市長と台北・高雄市議員のトリプル選挙

第九章 二〇〇〇年総統選挙と日台中の行方——「内憂

外患」と新総統への期待

第一〇章 一周年を迎えた陳水扁政権を検証する——第四原発問題と対中投資ブーム

第十一章 政治の内向化と経済の外向化——二〇〇一年

第五期立法委員・第一四期県市長選挙と中台経済関係

第十二章 対中経済依存と二〇〇四年総統選挙——二〇

〇二年台北市長・市議員と高雄市長・市議員の選挙

第十三章 台湾総統選挙と今後の中台関係——三回目を

迎えた総統選挙と台湾政局

終章 中台経済交流の回顧と展望——台湾本土化と中台

経済関係

あとがき

序章では、これまでの台湾における選挙の変遷について紹介し、「台湾経験」や「開発独裁」をキーワードに、台湾および台湾研究に対する問題意識を提示している。

第一章では、戦後の日本におけるアジア・中国意識と戦後の日本知識人の台湾意識の問題点を指摘したうえで、戦後台湾の政治・経済の発展過程を概観し、現在台湾が抱える民主化と経済発展の課題を検討している。

第二章は一九八九年の統一選挙と一九九一年第二期国民代表大会選挙の結果から、民主選挙の定着と国民党勝利の要因を分析している。

第三章は一九九二年から一九九四年までの一連の選挙結果と、台湾政治の複雑性と三党政治体制確立について取り上げ、台湾政治状況の変化について触れている。さらに、一九九六年三月の総統選挙を台湾の民主主義体制の完成と位置づけ、問題提起を行っている。

第四章では、「白色テロ」の下での民主化過程と民主化運

動の変遷について述べ、九五年の立法院選挙の選挙結果を分析し、「省籍矛盾」に起因した社会構造の複雑性と今後の中台関係と日本の対応について述べている。

第五章は、まず九六年の李登輝再選の要因分析を行い、今後の李政権の抱える課題とポスト李登輝の台湾の方向性について検討を行い、これまでの中台対立構造の変動と中台経済交流の進展を概観し、近年の両国の貿易・投資状況の推移から活発化する中台関係の現状を分析し、今後は資本・技術集約的産業の投資の増大と投資地域の拡大が見込まれるとしている。そして、李登輝政権の唱える「南向政策」や「東進政策」の状況を考察し、その限界性について指摘している。

第六章は李政権の一年を振り返り、中台関係について考察を行っている。李登輝政権に対する評価では、治安の悪化や社会秩序の混乱から民心が離れつつあるとし、それと対照的に陳水扁台北市長への支持の高まりと民進党への期待が高まっていることを紹介している。また、後半部分では、台湾の経済の対中依存の拡大を問題として取り上げ、李登輝政権と台湾の将来について考察している。

第七章では、第一三回県市長選挙における民進党躍進の要因を探り、対中政策・台湾アイデンティティについて行われた民意調査の結果から、台湾国民の民意の所在を明らかにしている。また、民主化の進展に伴い顕在化した社会矛盾の拡大や社会秩序の乱れといった問題について言及し、政府の実力と今後の課題について考察している。

第八章では、一九九八年立法委員と台北・高雄市長と台北・高雄市議員のトリプル選挙での国民党の躍進、民進党の停滞、新党の退潮の要因分析を行っている。また、台北市長・市議員選挙と高雄市長・市議員の選挙結果について

トップページにもどる

分析し、台湾の対中政策の曖昧さを指摘し、二〇〇〇年の総統選挙までの台湾の方向性について検討が試みられている。

第九章は、最初に二〇〇〇年総統選挙での各候補者の勝因と敗因の分析を行ったうえで、今後台湾が直面する問題として、内政問題、中台関係、国際関係の三点を挙げ、内政問題では、「省籍矛盾」の拡大、「黒金政治」への対応と国民党の党綱領問題について触れている。中台関係については民進党の党綱領問題と中国の攻勢への対応を検討し、国際関係については、日台文化交流の重要性、日本の「アジアの安定と発展」への役割と日台経済交流の促進について論述し、日本側の具体的な対応の必要性を訴えている。

第一〇章では、前半部分では陳水扁政権の一年を振り返り、低迷にあえぐ台湾経済、WTO加盟を睨んでの「三通問題」、第四原発問題による政局の混乱といった陳政権の抱える不安定要因について述べている。後半部分では、台湾・中国の統計資料、主要新聞の資料や經濟部統計処・經濟部投資審議委員会によるアンケート結果を中心に、近年急増する対中投資・貿易の質的变化について分析を行い、台湾での「政経分離」に拍車がかかっているとしている。

第十一章では、二〇〇一年第五期立法員選挙と第一四期県市長選挙の選挙結果分析を行い、それに関連する課題として、①政局立て直し②「黒金政治」問題、③運命共同体の建設、④対中投資の拡大と産業の空洞化を挙げ、それらについて検討している。後半部分では、台湾の対中貿易依存度、製造業別の対中投資額の推移、国別対外投資比率といった様々な指標から緊密化する中台経済関係の実態を明らかにしている。また、一九九〇年代からの台湾国民の政党別支持率の推移や国民の群族意識の変化を概観し、中台

トップページにもどる

関係の変化に伴う民意の変化を立体的に捉え、台湾アイデンティティの確立の必要性を説いている。

第十二章では、二〇〇二年の台北市長・市議員と高雄市長・市議員の選挙では政策論争よりも、「藍色連盟」と「綠色連盟」の両陣営のネガティブ・キャンペーン選挙の色彩が強いとしている。また、当選者の高学歴化や女性議員の増加、若年化について取り上げ、今後の政局の変化の可能性について言及している。後半部分では、今回の選挙結果と各種民意調査をもとに、二〇〇四年の総統選挙の展望とその課題について触れている。結論部分では、民進党の一貫した政策の欠如や政権運営能力の未熟さを指摘し、二〇〇四年の総統選挙を睨んだ形での問題提起を行っている。

第十三章では、第一一期総統選挙の結果と今後の対中政策についての分析とこの四年間の陳水扁政権の評価と今後の課題について考察がなされている。特に、今後の課題として台湾アイデンティティの確立と本土化の必要性について述べている。

終章では近年の中国との経済交流の緊密化の実態を様々な統計資料を用いて分析を行っている。後半部分では台湾本土化に伴う政治の内向化と経済の外向化についてふれ、現在台湾が抱える問題点を明確に指摘している。また、様々な中台間の投資活動に関する調査報告書から実際の台湾企業の中国における企業活動の問題点について様々な角度から指摘している。

あとがきでは、新しい時代を迎えた台湾市民が時代の経過とともに沈着冷静な目で行動する有権者へと変化してきたとしつつも、近年の理想(政治)と現実(経済)が大きく乖離し、台湾の若者の政治離れが進む中、今後の台湾がどのような未来を切り開いていくのかと台湾国民へ問いかけ

る形で締めくくられている。

本書は一九八九年から二〇〇四年までの各選挙の選挙動向について、主要新聞の資料や台湾・中国の各種統計資料を駆使するだけでなく、現地の友人や市井の人々から得た情報をふんだんに盛り込み分析を行っている。いずれの章においても、台湾の選挙動向をアップ・ツー・デートな形で紹介し、そこから見えてくる台湾の民主主義の深化を、民主化、経済発展、アイデンティティ、対中関係と関連づけた立体的分析を行っている。このような分析の背後には、経済のみならず、政治・社会・歴史・文化といった様々な諸相を捉えることにより、本当の台湾の姿を理解しようとする長年の著者の「現地主義」の実践があることはいうまでもないことであろう。一読をお勧めしたい。

トップページにもどる